

創作

言葉（歌詞）、リズム、メロディー、和音（コード進行）それぞれの関係を、教科書p.147～152にかけて学び、つくりあげた自分の音楽をp.153で編曲し完成させる。

この創作の活動を通して、音楽を聴くときに何に注目するかも意識できるようになる。

ヴォイス・リズムをつくろう

ここでは杜甫の五言絶句を取り上げたが、最近のさまざまな歌のテキストの多様性を考えると、通常の「詩」以外のものでもよい。日常の会話、教科書の文章、他教科の授業で覚えておきたい文章、早口言葉、円周率、外国語の文章、最近気になっている本の一節、など。言葉は、リズムやメロディーに乗せるとより覚えやすくなる。暗記なくとはいけないようなものを覚えやすくすることもできるかもしれない。

書かせるより前に、実際に言葉に出させた方が、弾みのあるリズムができるだろう。それを筆記させる。

言葉がもつリズムを重視させる。その一方で、あえて言葉のリズムに逆らった独特なリズムを考えるのもよい。クラスが大爆笑するほどのユニークなリズムは、印象に残りやすい。

「ラップ」をつくるイメージで取り組ませると効果的だろう。一方で、ゆっくりとしたテンポでつくと能の「謡」のような雰囲気にもなる。

🎧ヴォイス・リズムには必ず抑揚（高低）がついているはずである。これがいずれメロディーとなっていく。

🎧この活動を通して、さまざまなテキストのリズムに注目させる。

コード進行からメロディーをつくろう

教科書掲載の譜例やコード進行の他に、二つ例を挙げる。譜例1と譜例2の上段にメロディーを書き込む実習に取り組んでもよい。

譜例1

副5の和音が使われている（ト長調の中で、一時的にホ短調やハ長調のV→Iが見られる）。この和声進行を好む生徒は多いだろう。

譜例2

ドリア旋法（教科書p.157）を使っている（メロディーの第6音がF[♯]音。和音にGが用いられている）。旋法はさまざまな音楽で使われているため、この和声進行での実習も生徒たちに興味深いものだろう。

この譜例では原曲通りの拍子と調性で掲載したが、拍子を変えることで曲のイメージは大きく変わる。これを一つのヒントとしたい。

「和音（コード）からメロディーをつくるためのヒント」（教科書p.149）では、和音構成音がメロディーの主となる音であることを詳細に説いた。メロディーと和音との関係を丹念に学ばせたい。その上で、「隣の音」（和音の構成音ではない音＝非和声音）と和音がもたらす色彩や緊張感を感じ取りたい。

なお、譜例3として「⑥和声構成音以外の音から始めて、リズムをさらに工夫する」に補足をしておく。ここでは非和声音を多数使ってメロディーをつくる例を挙げたが、場合によっては、「付加音」として付け加えられたコードととらえることもできる。教科書p.158～159の「コードネーム」一覧とともに参考にしたい。

こうしたさまざまな和声進行やメロディーの作法がある中で、p.149の最後に掲載されている「も

譜例1 「おお シャンゼリゼ」より

譜例2 「グリーンスリーブス」より

譜例3 「和音（コード）からメロディーをつくるためのヒント」補足

譜例4 「リズムでつくろう」補足